

る。空気が濃い風の流れとなつてものに衝突し、鋭い擦れる音が鳴り響いた。X氏は、思考を中断して、起ちあがり、階段をおりて、外へ出た。頬を叩くばかりの風だった。長雨が止んでいる。空は満天の星だ。おびただしい星が宇宙空間に浮かびあがって、煌々と光を放っていた。天の星の輝やきが眼に眩しい。

X氏は、激しく吹く風のなかに立ちつくして、わが地球が疾走していくおとめ座銀河団の方を遠望した。X氏の眼に、夜空の星々は無数の呼吸する生きものたちと映った。いつのまにか、背中を折りまげて、風に逆らい、歩きはじめていた。

草の宇宙を見た公園まで歩き、その中央に立った。セイタカアワダチソウが風に薙ぎ倒されていった。風が空地で舞っているのか、方向が変わるのか、空カンが音をたてて転がっていた。

風は、地表のあらゆるものに衝突して、吹きぬけていった。100日も弓型の列島を覆った雲の軍団を運び去り、木の葉を乱舞させ、窓という窓、壁という壁に突きあたって、人を眠りから目覚めさせ、鳥たちを樹の上から追い払い、魚たちを大波でゆさぶり、濡れた砂を中空に舞いあがらせる大風だった。

X氏は、全身の細胞が風に呼応して騒ぎたてるのが快かった。身体の中にも風が立った。頭が空っぽになった。暗闇のなかに凝っと立ちつくしていると、闇の階段を駆けのぼって、眩しく煌めくおとめ座銀河団の方へ走って行けそうな気分になった。心の昂ぶりが強くなって、神経のリリース

が切れそうだった。

夜を徹して、大風が吹いた。夜の底が白くなって、無数の星が消える頃、X氏は部屋に帰って、材木のように身体を横たえた。長雨が終わったのだ。空っぽになった頭で、それだけ考えると、深い、深い眠りが来た。

黄金の光が枕もとにこぼれていた。光が左手に触っていて、手の甲が熱い。夏の光だった。光にも重さがあるような気がする。これが光の感触だ。窓の外に、子供たちの笑い声があった。長い間、忘れていた声だ。鳥たちが鳴いている。風の音はない。ズーッと、何かを妊娠していたような気がした。100日間も雨が降らなければ妊娠できないものとは、いったい何だろう。わからない。

今日は土曜日だ。仕事は昼までに終わってしまうだろう。明日の日曜日は、あの女と海へ行くことになるだろう。約束は約束だ、実行する。賭に勝ったのだから当然だ。女は、偶然、あなたが勝ったのよと言うかもしれない。そうかもしれないし、ちがうかもしれない。

X氏は、起きあがって、サンドイッチを噛り、ウーロン茶で流しこみ、水玉模様のネクタイを洗って、歯を磨いた。

眼が鳶色に光っていた。鏡のなかには、10年も前のX氏の顔があった。夜を夜とも思わずとび廻っていた頃の眼だ。ところかまわず練り歩いていた、人を人とも思わず、眉間を叩き割る眼だっ